

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	渋谷区障害者福祉センター代々木の杜		
○保護者評価実施期間	令和7年9月2日		～ 令和7年10月4日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	40	(回答者数) 33
○従業者評価実施期間	令和7年9月2日		～ 令和7年10月4日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年12月20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	集団活動の場が安心できる居場所となり、同じグループの仲間として認め合うことを大切に指導している	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを表現すること、大人は何を伝えたいのかを想像し受け止めることを大事にしている。 できるだけ子ども同士の相性や特性を考慮してグループを組み、子ども同士が楽しめる場の設定を心がけている。 	<ul style="list-style-type: none"> 5領域を意識したプログラム作りをしているが、余暇や趣味を広げるような様々な体験プログラムも増やしていく。
2	家族支援を意識した療育の提供を意識している	<ul style="list-style-type: none"> 多機能事業所であるため、児童発達支援事業と合同で家族交流会や療育講座などを行っている 保護者会を実施し、保護者同士のつながりや共通する悩みについて話し合う機会を作っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者がどのような支援を求めているのか、どのような情報が足りていないのかなどを整理し、テーマを絞った交流会、保護者会を開催する。同時に、保護者だけでリラックスして話ができるような茶話会も設定していく。
3	児童発達支援に通っていた幼児期から、継続して子どもの成長・発達をみることができている	<ul style="list-style-type: none"> 小さい時の特性、現在の環境変化と子どもの様子を照らし合わせながら、保護者とともにその時の心配や困り感を共有して解決策を探していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ケース会議を行い、長いスパンで子どもの成長や今の課題を結び付けて検討していく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	利用児の受け入れは小1～小3で定員いっぱいになっており、高学年の受け入れはできていない。	<ul style="list-style-type: none"> 小学校への就学は大きな環境変化である。子どもたちの混乱やストレス、保護者の不安に寄りそうことを目的に低学年を優先している。 	<ul style="list-style-type: none"> 当事業所の放デイを終了した児童や家族とのつながりがとぎれてしまっているため、利用終了後のフォローやつながりについては検討中である。
2	放課後等デイに保護者や利用児本人が何を求めているかを十分に把握できていないのではないかと。	<ul style="list-style-type: none"> 保護者とじっくり話す機会は、支援計画の面談以外では話をする時間を作れていない。特に本人にサービスの内容や何をここでやりたいかを聞き取るという時間を設定できていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの発達や特性についての評価に基づいて支援計画は立てられており、本人への発達支援として大きく外れていることはない。その活動や目標が本人も望むことなのかを確認する機会を作り、またその確認方法を工夫していく。
3	グループのメンバーに通常級、特別支援学級、特別支援学校の児童がおり、活動プログラムの設定が難しくなっている。	<ul style="list-style-type: none"> 10人の児童に対して2～3人の職員を配置しているが、2つにわけて活動する必要性が高まり職員の手が足りないときもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員の配置を検討するとともに、2つのグループでプログラムの流れを調整するなど、活動に強弱をつけて対応できるように検討する。